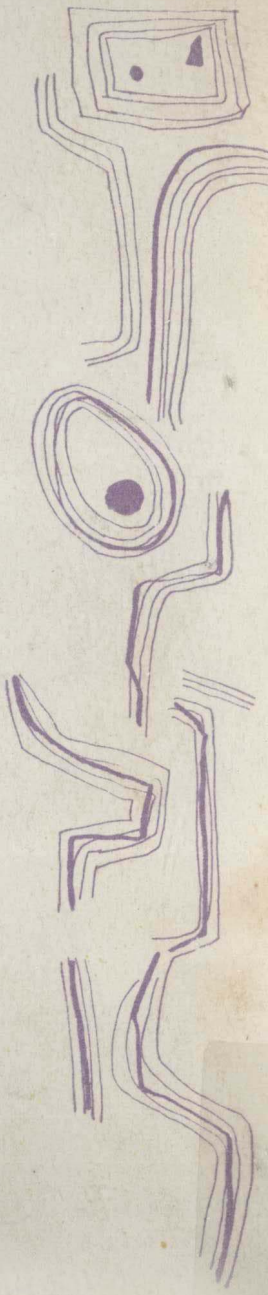

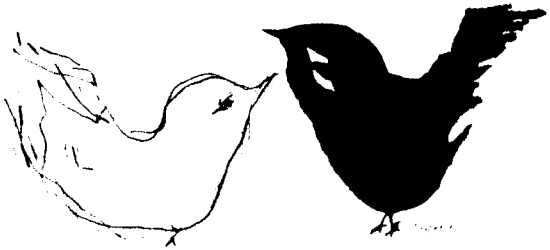

悪妻列伝

竹森一男

光風社版

悪妻列伝

昭和三十九年三月二十日　印刷
昭和三十九年三月二十五日　発行

定価　三四〇円

著者　竹森一男
発行者　豊島清史
印刷者　染谷秋雄

発行所　株式会社　光風社
東京都千代田区神田錦町三ノ一四
電話東京(〇)二三八番
振替東京五六五二六番

乱丁・落丁は御取替いたします。

目

次

第一話　夫唱婦唱　七
第二話　恐妻について　四四
第三話　倦怠期　七三
第四話　浮気の風　一〇二
第五話　亭主関白の由来　一二五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第六話　元の枝へ　一六六
第七話　金　婚　一九〇
第八話　青い鳥　二三二

裝幀　勝呂　忠

悪妻列伝

第一話　夫唱婦唱

一

その日は陽春の光がぱっと照りかがやいて、なんとなく気持のうきうきする日であった。若井誠太は、すじ向いのデスクで、しきりに伝票計算をしている春野杏子に言った。

「日がいいよ。部長を誘うからね」

春野杏子はコックリしたが、水蜜桃のようにキメのこまかいふっくらした頬がぱっとあからんだ。若井誠太はゆびを弾き、快活に立ちあがった。営業部のオフィスの奥に部長の個室があった。

「おお。若井君か」

神原部長は顔をあげた。
「失礼します。部長！」
「どうしたんだ。いやに固くなっているじゃないか。うん？　若い若井君」
「はっ……」
と、若井誠太は不動の姿勢をとっていた。
長身痩躯、白髪の部長は鋭い眼で若井をみつめた。三角の鋭い眼、さきのとがったカギ鼻が鷲のような印象である。会社でも骨っぷしのある部長として、重役連もいちもくおいていた。公務のときは、部下をピリッとふるえあがらせるが、根はやさしかった。若い社員たちには、話せる部長なのである。
「部長に告白することがあるんです」
「告白？」
「ひるめしでもいただきながら、きいてもらいたいと思います。ご都合はいかがでしょうか」
「いやに切口上だな。重大事件と見えるが」
「重大事件であります」
「では、地下の木曽路へでも行くか」
「ありがとうございます」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「うなぎのお重でもとって、待っていてくれんか。なるたけ早く行く。お重の大をとっていいぞ」
「きょうは、ぼくのほうが、部長におごります」
「え？　それは重大事件だ」
神原部長は、恐ろしい顔で、ニコリともしないのである。若井誠太は、一礼すると、部長の洒落をあたたく胸に刻みながら、デスクへもどった。オフィスの電気時計は、正午五分前を示していた。
ひるやすみを知らせるチャイムが、さわやかに、青春の解放感を謳っているように、若井はきいた。何もかも美しく、たのしく感じられるのである。
若井の会社は、虎の門から霞ガ関に寄ったEビルの七階にあった。新築の豪華なビルで、廊下は大理石であり、すべてがピカピカかがやいていた。資本金六十億の太陽産業株式会社は、いまや旭日昇天のいきおいにあり、若井もまた青春の太陽にむかっていた。
「心臓がドキドキするわ」
と、地階の「木曽路」でテーブルにむかいあうと、春野杏子は青い事務服のふくらんだ胸を、大げさに抱いてみせて、なやましそうに黒いゆたかな髪をゆすぶった。
「部長さん、何ておっしゃるかしら」

「そりゃ、よろこんでくれるさ。相談しないと、かえってごきげんがわるいよ」
「はずかしいなあ」
「大のお重を三つ注文しとこう。重大事件だからな」
若井は部長の洒落を受け売りした。
お重とキモ吸いの椀が運ばれて来たとき、神原部長は、長身を折るようにして、木曽路のノレンをくぐって来た。
「おや。春のような春野君もいっしょか」
「はい」
「ふたりそろうと、春の陽光が眩しいくらいだね。いい季節だなあ」
「いい季節です」
「きみたちのことを言っているのだ。ほう！　重大事件だ」
と、神原部長はお重の黒ぬりのふたをうやうやしく取った。
「遠慮なくいただくよ」
「どうぞ、どうぞ」
「わかったよ」
神原部長は不意に箸をとめた。

「きみたちは、ワリカンで、私におごっている。そうだな？」
「ご明答です」
「そうだろう？　重大事件の味がしたものな。つまり、婚約の味だ」
若井誠太は頭をかいた。サッと春野杏子の顔があからんだ。
「さすがに部長です」
「そのくらい、わからんでどうする。ほめられて、恐縮である」
「まだ、誰にも知らしていないんです。まず、部長にお知らせして、諒解を得たいと思いまして……」
「そうか。なるほど。きみたちには、重大事件にちがいないな。しかし、諒解をえる必要はないだろう」
「いいえ。社内結婚でもありますし、いろいろ、部長のお力添えをねがいたいのです。ホヤホヤの告白なんです」
「私は不賛成だな」
「えっ……」
こわい顔で、神原部長はビールを注文した。
「私は、かねがね、きみたちが結びつくだろう、と見ていたんだ。若井君は明るく素直な好青

年で、会社の仕事にも研究心が旺盛である。春野君は春の野辺でヒバリが囀っているような娘さんだ。いつも微笑していて、どんなイヤな仕事でも、ハイハイと悪い顔をしない。顔はまんまるくてかわいいが、案外シンはつよくて心がきれい……」

「ありがとうございます。すると、どういうところが、いけないんでしょうか。不賛成とおっしゃったのは」

「あんまりよすぎて、ヤケたのである」

「まあ」

と、春野杏子は、うつむいてクスクスわらいだした。

「そういう意味で乾盃と行こう。ビールは、私がおごる」

三人は、ビールのグラスをあわして乾盃した。

「それで、結婚はいつなんだ」

「はい。秋がいいと思います。あと半年くらいは……」

「いいだろう。婚約期間は、ながいほど楽しいもんだ。ふたりで、よく相談して、結婚の設計をするのだな」

「はい」

「いいなあ。これから結婚するひとは、うらやましいよ。あの新鮮で、うずくような幸福感は、

一度と味えないからな。私のように、子どもがデッカクて銀婚式となってはねえ……」
と、神原は、新婚時代をおもいだすように、眼を細め、くちびるに恍惚(こうこつ)とした微笑をうかべながら遠くをみつめた。
「しばらくは、共ばたらきで行くか？　それとも、新妻は家庭へ入るか……」
「まだ、そこまでは考えていないんです」
「近ごろの若い者は、どうやっているんだ。つまり、婚約というのは、すでに事実上の夫婦に……」
「部長。ぼくたちにかぎって、そんな……」
「うむ。よろしい。接吻(せっぷん)の程度だな」
まじめくさって、神原はひとりうなずいている。ふたりは、てれくさそうに顔を見あわせた。
「結婚までは、大事にとっておいたほうがいいぞ。そのほうが新婚初夜(しょや)のねうちが倍増する、というもんである。倍増というと、若井君の昇給を考えんといかんな」
「おねがいいたします」
「おねがいいたします」
と、春野杏子も頭をさげた。
「こりゃ。春野君はすでに経済を考えておるな。ちゃっかりした女房ができるであろう」

「あら……」

若井誠太は吹きだした。わらいながら、じいんと胸に沁みてくるものがあった。部長の人間味である。打ちあけてよかった、と思った。そして、ほんとうに自分はしあわせものだ、と思った。

「ふたりで、一度、うちへも遊びにこんか。夫婦生活の機微について、いろいろ、参考になる話をしよう。先輩は語る、というわけさ」

「ぜひ！」

「男の立場から、いろいろ教えたいことがある。春野君は、ひそかに、うちの女房にきくんだな。夫の繰縦法をね」

「ふふふふ」

「わらいごとではない。結婚は最初が大事だ。将来、何十年間の夫婦生活において、どっちが飼育されるか、という重大事件である」

神原は、腕時計を見ると、忙しそうに立ちあがった。

「とにかく、おめでとう。ぜひ媒妁をしたいが、社長が承知せんだろう。社長は若がえりの方法として、若い社員の媒妁をしたがっておる。せめて、老社長にホルモンを供給してやってくれたまえ。私から話しておく。勘定は私がすましておいた」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.